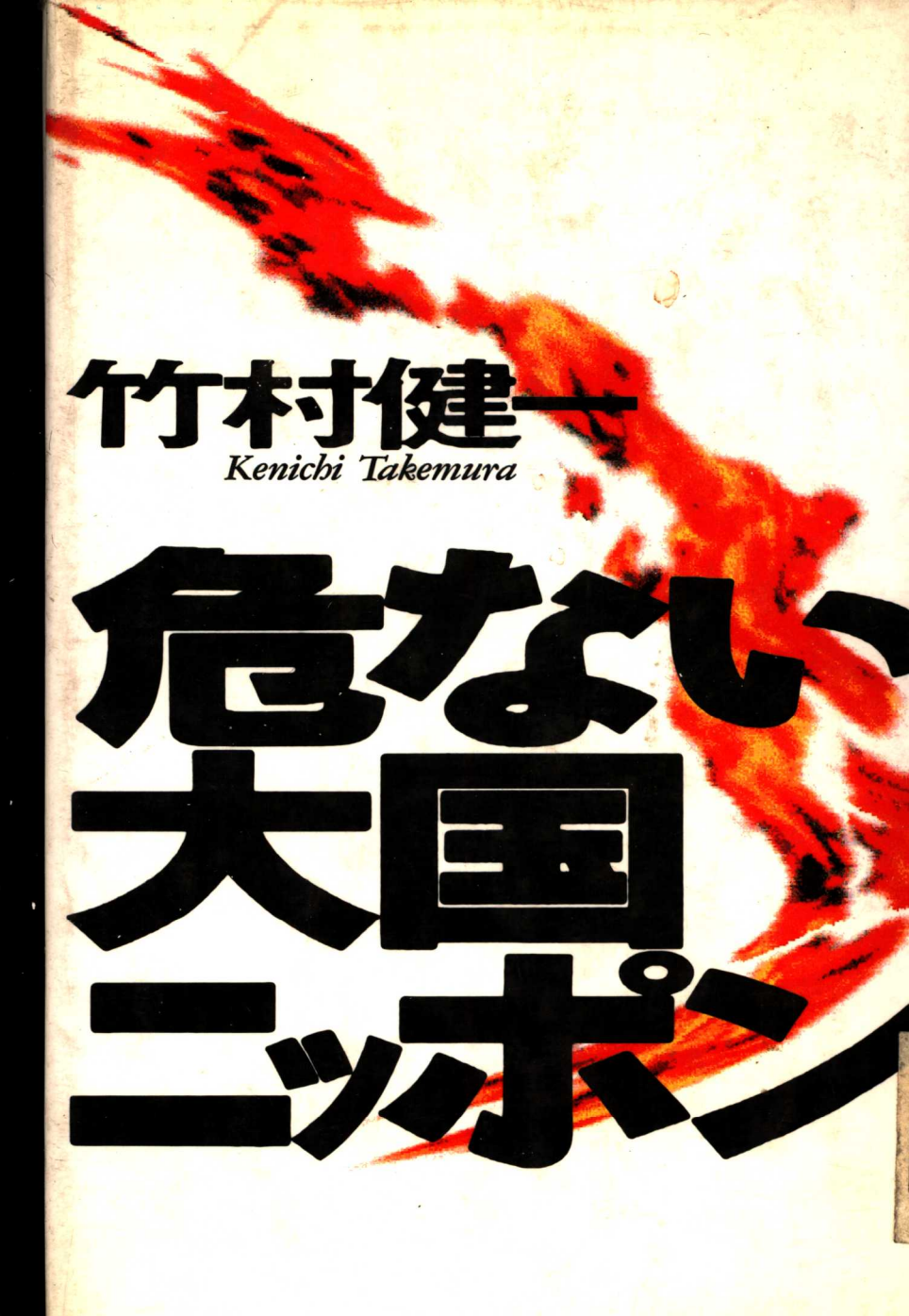




竹村健一

Kenichi Takemura

危ない
大国
ニッポン

112
C02
529

竹村健一
Kenichi Takemura

危ない、 大国 ニッポン



NB

1992, 9, 25.

学習研究社

著者紹介



竹村健一 (たけむらけんいち)

昭和5年大阪府生まれ。京都大学英文科卒業後、エール大学などに留学。「英文毎日」記者を経て、評論家となる。「世相を斬る」(フジテレビ)での明解かつ先見性ある論評は、政財界はじめ万人に常に注目されている。

著書に『日本の常識は世界の非常識』(ダイヤモンド社)『日本の悲劇』(祥伝社)『日本は再び孤立するか』(太陽企画出版)など多数。

危ない大国ニッポン

1992年3月5日 第1刷発行

1992年4月10日 第3刷発行

著者——竹村健一

編集人——小向正司

発行人——高木俊雄

発行所——株式会社学習研究社

東京都大田区上池台4-40-5 郵便番号145

電話・東京(03)3726-8111 振替・東京8-142930

印刷所——信毎書籍印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

©Kenichi Takemura 1992 Printed in Japan

無断転載・無断複写複製(コピー)を禁ず

この本に関するお問合せやミスなどがありましたら、文書は〒146東京都大田区仲池上1-17-15 学研お客さま相談センターへお願いします。

165 443 ISBN4-05-106059-4

竹村健一(たけむら けんいち)

昭和5年大阪府生まれ。京都大学英文科卒業後、エール大学などに留学。「英文毎日」記者を経て、評論家となる。「世相を斬る」(フジテレビ)での明解かつ先見性ある論評は、政財界はじめ万人に常に注目されている。著書に『日本の常識は世界の非常識』(ダイヤモンド社)『日本の悲劇』(祥伝社)『日本は再び孤立するか』(太陽企画出版)など多数。



はじめに

一九九二年の幕が開けた。激動の九〇年代はまだ始まったばかりであり、今年も予断を許さない緊張の年となることだろう。

第一に、旧ソ連邦の行方である。市場経済への移行のメドも立たず、独立国家共同体の動向も波乱含みである。まして「核」の管理をどうするのか……など、いつ何が起こっても不思議ではない。

第二は、アメリカもECともに深刻な景気後退に見舞われており、いっこうに回復の兆しが見えてこない。もし、いま旧ソ連邦に何かが起こり、日・米・欧の先進諸国が対応をひとつ誤ると、世界同時不況という可能性も否定できないだろう。

第三に、今年はアメリカ大統領選の年であるが、ご存じのようにブッシュ再選に陰りが

見え始めている。アメリカ国内では、私がこれまで紹介した「アメリカ・ファースト」(アメリカの国益第一主義)に代表される経済のプロック化、保護貿易を叫ぶ声が強まっており、そのことは勢い日米間のいつそうの緊張を予測させる。

大きくいつて、この三点が懸念される世界情勢の中で、唯一、日本だけが経済大国として繁栄を謳歌しているが、それゆえに今後、日本は世界からさまざまな要求をつきつけられることは避けられない。それだけ日本の責任が、世界の中で大きくなっているといつても過言ではない。

にもかかわらず、その日本が国内の政争や政治スキャンダルに明け暮れ、その結果、経済不況といった不測の事態が起こるようなことになれば、「ニッポン大変」はもとより「世界大迷惑」といった結果になりかねない。

私は昨年、『日本の悲劇』『日本は再び孤立するか』の二冊で、湾岸戦争での日本の「非常識」をはじめ、日本に降りかかろうとしている「国難」についてとりあげたが、「危ない大国ニッポン」の状況は依然、変わっていない。いやむしろ、私の不安はつのる一方である。

私の講演に集まる多くの聴取者が、同じように日本の未来に懸念を抱いているのを痛感し、いま私は再び「警告の書」を世に問うものである。

*

さて、このような思いを抱いて原稿を書いていた矢先の今年一月、アメリカのブッシュ大統領が来日した。しかもアメリカのビッグスリーといわれる自動車メーカーのトップをはじめ、二〇人ぐらいの経営者が一緒に訪日するというので、政財界ともに大揺れになることが懸念されていた。しかし実際には、「大山鳴動して鼠一匹」という結果に終わったことはご存じのとおりである。

今回のブッシュ訪日は、これまでとは様相を異にする事態をもたらした。それは、ビッグスリーのトップが随行することになったおかげで、アメリカの新聞記者たちが猛烈に日本の自動車産業の状況を勉強したことだ。

そして調べれば調べるほど、日本人がアメリカの車を買わない、輸入しないというのは事実だけでも、それはアメリカの自動車の品質や性能が悪いからだ、ということがわかってきたのである。

日本に比べて品質や性能が劣る自動車をつくっているから売れないし、会社も儲からない。そんな儲からない会社なら経営者が首になっても不思議はないのに、首になるどころか、ビッグスリーの経営幹部は何百万ドルもの給料をもらっている。

そこでアメリカのある新聞には、

「ビッグスリーこそ尻を叩かれるべきだ。ジャパン・バッシングではなくて、このビッグスリーをバッシングしろ」

という記事が載ったし、さらには、つぎのように書いた新聞もあった。

▽「大統領は日本へ勉強をするために行きなさい」

日本ではなく、アメリカの新聞がこういうふうに書いているのである。

アメリカの民主党議員は猛烈に日本叩きをする。中でもゲッパート下院議員などは、かなり手きびしい日本叩きをすることで知られており、

「アメリカは一九八五年のドル安以来、ヨーロッパとの貿易は黒字になっている。ところが日本とは、いつまでたっても貿易赤字が減らない。これは日本が門戸を開きしているからだ。アメリカの自動車が売れないのも、自動車そのものは日本と同じようによくできているのに、日本が受け入れようとしなからだ」

といい続けてきた。

日本が黒字を続けていることは事実である。つい最近発表された一九九一年の貿易統計によると、一九九一年の日本の貿易収支は七八二億ドルという、史上三番目の大幅な黒字を記録した。そしてアメリカとの貿易黒字は、何と三八四億ドルにものぼっている。

しかし今回のブッシュ訪日にさいし、アメリカの新聞が、実はアメリカの自動車はヨー

ロッパでも売れていないということを書きたてた。ドイツやイタリアのように自動車を生産している国に対しては、アメリカの貿易は赤字になつてゐるのである。対日赤字ほど大きくはないものの、それでもドイツとは三八億ドル、イタリアとは二八億ドルという赤字になつてゐる。ヨーロッパだけが門戸を開いて、アメリカ製品を積極的に買つてゐるわけではないのである。

ブッシュ大統領の訪日のおかげで、はからずもアメリカ国民の多くが、アメリカの自動車や日本で売れない本当の理由をはつきりと知ることになった。その結果どうなるか。これはやはり日本ではなく、ビッグスリーが悪いという方向に行かざるをえなくなる。

アメリカの国民も国会議員も、日本が悪いというよりは、アメリカ自身に本当の問題があることが今度こそはつきりとわかつた。ブッシュ訪日は、当初の意図とは全く逆の結果を招いてしまつたのである。

*

現在の日本は、たとえていうなら「豪華客船」である。シャンテリアがきらめく船内で、人びとが着飾つておいしいものを食べてゐる。しかしその客船がどこへ行こうとしてゐるのか、誰も考えようとしないし、船長もその船をどちらに向ければいいのかわかつてゐない。このままでは座礁するかもしれないし、あるいは敵に爆撃されてしまうかもしれない、

というような何とも頼りない「豪華客船」である。

だが私には、これはいまに始まったことではなく、昔から日本はそんな国であつたように思えてならない。たとえば第二次世界大戦のとき、日本は真珠湾を奇襲し、大成功をおさめた。しかしその結果どうなつたかといえば、アメリカ中を怒らせてしまい、徹底的に日本をやつつけろという気運が高まつてしまつた。

また戦争が終わる直前、アメリカの硫黄島上陸では二万人ものアメリカ兵が戦死した。そのため、アメリカが原爆を落とす引き金になつたということが、ごく最近明らかになつた。

「硫黄島ひとつとるのにアメリカ兵が二万人も殺されるなら、日本本土へ上陸したらどれだけ犠牲が出るかわからない。これはもう原爆を使うしかない」

硫黄島の結果が、トルーマン大統領に原爆の投下という決定を下させてしまつたのである。歴史に「イフ」などないことは私も十分に承知しているが、それでもあえて「イフ」を考へることで、歴史の教訓を現代に生かすことができるのである。

この硫黄島での出来事を逆に見れば、アメリカ軍がもし簡単に硫黄島をとっていたら、原爆を落とさなかつたかもしれないということになる。結局、日本は、アメリカ軍に多大な犠牲を与えるという意味では戦術的には成功したけれども、戦略的には大きなマイナス

を招いてしまったといわざるをえない。

日本人は一人ひとりはみんなよくやっているが、そうやっていると必ず日本のためにならずに逆の結果を招くという点で、いまの日本の状況は太平洋戦争当時と非常によく似ている。

たとえば自動車産業を例にすると、日本の自動車メーカーは世界一いいクルマをつくって安く売っている。故障はしないし、納期も正確だからいうことはない。その結果どうなったかというと、世界中から文句をいわれている。

いいものを安く売って、どうして世界中から怒られるのか、と日本人は思っているわけだが、この問題について、ソニーの盛田昭夫会長はわざわざ私に電話をかけてきて、「大発見をした」といつてこう語った。

「日本人はこれまで、いいものを安く売ってどこが悪いんだと思ってきたが、これが欧米の競争ルールに違反するということだ。いいものは高くしなければいけないようだ」と。

ヨーロッパの商売のやり方というのは、ベンツやルイ・ヴィトンを見てもわかるように、いいものは高い値段をつけ、たくさん売れなくてもいい、というものだ。そこへ日本が、いいものを安い値段で大量に生産して世界を席巻してきた。自動車に限らず、日本はアメリカの電器メーカーやオートバイメーカーを潰し、ドイツのカメラ業界を壊滅に追いこん

できた。ひとつの産業がなくなれば、そこには当然、何万人という失業者が出る。それを
欧米の人びとは怒っているのだ。

先日、中曾根康弘元首相にお会いしたさい、こういつていたのが印象的であった。

「技術がよくて安ければ、売れるのは当たり前というのがいままでの理屈でしたが、それ
ではたして今後も通用するのか。日本の資本主義もこの辺でもうすこしスピードを落とす
とか、相手の立場を慮った「棲み分け」を考えなければならぬのではないか」

私も全く同感である。こうしたことを、日本人はいままで全然わかっていなかったのだ。
日本が門戸を閉ざしているとか、なかなか輸入しないという問題もあるが、日本がべらば
うに安い値段で大量にものをつくっていることが世界を困らせてきたのである。

私はトヨタ自動車の豊田章一郎社長や幹部に会ったびに、

「一〇台売って一〇〇〇万円儲けるのではなく、値段を高くして、一台で一〇〇〇万円儲
けるようにしたらどうですか」

といってきたが、そのトヨタ自動車がいま大きく変わり始めている。

トヨタの世界シェアは約四三％ぐらいだが、トヨタはこれまで「世界中のシェアの五割
をとる」などと豪語していた。それが最近では、「これくらいいいのではないか」とい
うようになっていいる。あのトヨタが、である。

ソニーやトヨタのよりな世界的な大企業が目をさませば、日本の企業のみならず日本人の考え方も大きく変わっていくかもしれない。そして、こうした動向が主流となれば、日本も晴れて国際社会の一員として世界中から頼りにされる国家になると、私は明るい期待を持っている。だが、それが現実になるのは、いったいいつのことか……。

一九九二年立春

竹村 健一

目次

危ない大国ニッポン

はじめに

第1章 ニッポン大変・世界大迷惑

1 多くの人びとが日本の世紀末に不安を抱いている

● 22

日本は本当に「極楽」だといわざるをえない。日本の悩みなどというものは、世界の基準で見ればほんの些細なことにすぎない。

22

日本人というのは、根は善良な民族である。しかし外国人からは、軍事で失敗したから今度は経済で世界侵略を企んでいると恐れられている。

24

私は何といわれようと、日本のことを考えたらアメリカと縁を切つてはいけな
と思つている。たとえ不人気であつても、私はこの説を曲げる気持ちはない。

28

2 日本人は国際情勢となるとなぜ先見力がないのか

31

日本では戦争は起きないと楽観視する、その極楽とんぼぶりには全く啞然とさせられる。本当に平和を望むなら、戦争の何たるかを学ぶことが大切だ。

31

日本はいままで自衛隊の存在を曖昧なままにしておくのか。「国連軍の一員として」という制約のもとでなら、海外への派兵を考えてもいいのではないか。

34

もし日米安保条約が破棄されたら、円や株の大暴落が懸念される。日本の安全をめぐる不安が一気に表面化するだろう。

37

3 「愚者は体験から学び、賢者は歴史から学ぶ」

40

日本人のように、過ぎ去ったことは何でもすぐ忘れてしまう国民には信じがたいことだが、アメリカ人は真珠湾をけつして忘れることはない。

40

なぜ、日本は日露戦争でロシアに勝つことができたのか。その最大の理由は、日英同盟があったからである。

43

平和憲法がなかった昔でも、日本は外国を助けるために兵を動かしたことは一度もない。わずかばかりの援助でお茶を濁すのが日本のお家芸のようである。

45

日本はアメリカやイギリスという大切な国と親しい関係になるチャンスをつつてみすみす二度も逃してしまった。

48

はつきりいえば、日本は外国から愛されていないのである。他人のために命を捨てるという気持ちのない国民が他人から愛される道理はない。

52